

令和2年度第2回高知県産業振興計画フォローアップ委員会観光部会 議事概要

日時：令和3年1月20日（水） 9:30～11:50

場所：高知城ホール 4階 多目的ホール

出席：部会員10人中、8名が出席

議事：（1）第4期産業振興計画＜観光分野＞の令和2年度の進捗状況等及び令和3年度の強化のポイント

（2）その他

議事について、県から説明し、意見交換を行った。（主な意見は下記のとおり）

議事については、部会員からの異議はなく、すべて了承された。

※意見交換概要

（黒笹部会員）

- ・ 新型コロナウイルスにより観光に深刻なダメージを受けているのは本県だけではないと思う。その対策を日々考え、観光キャンペーンにおいて、新型コロナウイルスを意識しつつ、将来に渡って粛々と取り組んでいく必要があり、ウィズコロナ、アフターコロナの時代においては、この2つをもっと有機的に連動しなくてはいけないと考える。
- ・ 本県の感染者数が他の都道府県と比較すると少ない状況で、感染者が0人の状態が続いており、本県はコロナフリーというイメージがあったが、すぐに雲散霧消してしまった。観光地を選ぶ基準として感染状況を意識しながら選択するというのが今後の大きい流れとなる。難しいと思うが、今後は本県がコロナフリーであるイメージを観光振興の取り組みの一環として発信していくのが肝要だと考えている。県庁は縦割りになっていると思うが、観光キャンペーンと新型コロナウイルスの所管部署がどちらも双方を意識しつつ、高知らしい新しいウィズコロナ時代の施策を展開してほしい。
- ・ 例えば、カツオ人間と同じようにコロナ君というゆるキャラを作り、コロナ君が「高知は住みにくいな」という展開をする。本県では、観光を迎え入れる側が日々の暮らしの中でコロナを制御しており、コロナフリーであるということをアピールしてほしい。そして、心置きなく遊べるための施策をやっているという情報を出していくことで、深層心理に訴えかけることができると思う。自然体験はコロナと遠い話なのでこれもアドバンテージだと思う。
- ・ 持続的な体験観光のためには、遊びと学びの融合が必要。「レクチャーツーリズム」を意識して1つの観光パッケージにするなど工夫してほしい。また、受入側であるガイドもレクチャーを意識したおもてなしをする。キャンペーンの中にも盛り込んでもらいたい。
- ・ インバウンドは当面ないものとして、どのようにマイクロツーリズムでつないでいくかが、重要となる。外国人に通用することは日本人にも通用すると思うので、あまり分ける必要はないと考える。

(吉村部長)

- 本県では、感染症対策として、危機管理部や健康政策部を中心とした感染症対策本部を設置し、状況に応じた対応をしている。一方で、需要の回復を図るため、プロジェクトチームを組織しており、この2つでアクセルとブレーキを踏み分けるような仕組みで運用している。まだ不十分なところがあると思うので、感染症対策を踏まえたハード、ソフト面の受入環境の整備を官民連携してこれからも進めていきたい。また、高知らしさのあるわくわく感や奥深さを伝えていかないといけないと思うので、いただいた意見をもとにリョーマの休日キャンペーンの内容を突き詰めていきたい。
- アドベンチャーツーリズムにおけるガイドのサービス提供は非常に重要なこと。レクチャーツーリズムを意識して、アドベンチャーツーリズムに組み入れていきたい。
- マイクロツーリズムの思想の中には、これまでのインバウンドによる経済波及効果を、当面は国内観光を振興させることでカバーするというものがある。インバウンド観光施策で培ったものを活用し、組み入れていきたい。

(黒笹部会員)

- 感染症対策はアクセルになり得る。アクセルとブレーキ論ではない考え方を取り入れてもらいたい。

(赤池部会員)

- インバウンド観光について。VKJ（ビジット高知ジャパン）でのプロモーションビデオの閲覧数は、2020年までは全然上がらなかったが、今年度は全国トップレベルとも言える、2,000万件を超えている。海外の方に動画を見ていただくと、「綺麗、行きたい、楽しそう、でも行けない」という声があるため、その国で高知を体験できる仕組みを作っていただきたい。例えば、高知の食品を買えるサイトや土佐料理を食べられる現地のお店の紹介、高知とゆかりがあるその国の観光地の情報を伝えることなどが考えられる。2024年までの間、こうしたオンラインやリアルの世界で高知を体験できるプログラムの実施を検討してもらいたい。
- 大学生のワーケーションについて。首都圏の大学生は本県よりさらに厳しい環境でストレスがかかっており、新型コロナウイルスの雰囲気から離れた場所で学びに集中したいというニーズが高いと考える。大学生なので、ワーケーションではなく「スタディケーション」といった名称になるかもしれないが、来年度以降、大学のガイドラインのフェーズが下がった時にスタディケーションを推進できないか、検討いただきたい。併せて、市町村からは受け入れる地域側の理解を得ることが難しいと聞くので、マニュアルの作成に加えて、県から高知で勉強しようという姿勢を発信してもらいたい。

(小西課長)

- 本年度から自然などをテーマにした動画を作成し、YouTube の広告配信を活用して、中国を除く海外の重点市場で配信しており、KPI を超える視聴者数を達成。どんな人が見ているか分析して、VKJ に誘導するバナー広告を追加して次につなげていく。大学の関係では、特に台湾の方に見ていただいて、次につなげていきたい。
- それぞれの国で高知を体験できる商品について、物販等 EC サイトがこれから普及していくと思うので産業振興推進部とも一緒に、うまく活用して情報発信していきたい。

(別府課長)

- ワークेशनについて、現在ターゲットにしているのは企業やフリーランスの方で、学生のイメージは持っていなかった。学生のニーズがあるならば、ターゲットとして取り組みを進めていきたい。

(町田部会員)

- 感染症拡大により I T やオンラインによる交流は加速することは間違いないので、オンラインでの国際交流を発展させていきたいと考えている。ただし、オンラインのツールを使う会議等のため、国際交流をサポートできる I T 技術に長けたファシリテーター的な人材を、スポット的に活用するのではなく、育てる必要があるのではないかと。

(吉村部長)

- I T リテラシーを向上させることは、コロナ禍に関わらず重要であると思っている。I T スキルを持った人材の活用について、どのように取り入れていくか知恵を絞っていきたい。また、関西連携の中でのデジタル技術を活用したバーチャルツーリズムなど I T を活用した観光施策を組み上げていきたい。

(古谷副部長)

- お客様から高知県はコロナにかかっている人がいないから大丈夫という声を聞くことが多かった。全国的に感染拡大したときも、高知県では回復基調であったが、感染の第 3 波では急激な落ち込みとなった。予想はされたことなので、今後の施策の中でコロナと向き合いながらどういった形で観光を取り上げていくかが非常に大事になっている。アフターコロナにおいて、コロナ対策をアクセルにして施策を展開してほしい。県庁内の部署間でコロナ対策、観光振興を一体として考えて打破してほしい。プロジェクトチームでも検討して、計画を立ててほしい。自然体験というコンテンツができ、全国から観光客が来るようになったし、G o T o トラベルの実施は、観光に即効性があることが分かった。G o T o 再開に合わせて施策を展開してほしい。

(吉村部長)

- ・ 経済影響を最小限に食い止められるよう、事業の継続、経済需要の回復、社会構造変化への対応という3つのフェーズに分けて対策を組み上げていく作業を進めている。G o T o トラベル事業は、制度も見直しされつつ延長される。観光振興部で検討を重ねていきたい。

(谷脇部会員)

- ・ 自然体験を活用してどのように滞在してもらうかが重要。そのためには、地域コーディネーターが文化など無形のものをどうやって伝えるかが重要。一方で、面として考えたときには、県内でもDMOが少しずつできていると思うが、高知県全体を網羅できるようなDMOの創設ができるよう支援してもらいたい。特に高知市にはDMOがまだないので、物足りなさを感じる。
- ・ 感染症への対応は、科学的な根拠をもとにした基準を作っていく、安全である認証制度を作って、施設の安全を証明する取り組みを取り入れてはどうか。観光客に安全であると思ってもらうことが重要だと思う。
- ・ この1年で、「新しい生活様式」、「新しい旅のスタイル」など新しい言葉が生まれた。今後どうなるかは全く分からない。県も大変だと思うが、積極的なプロモーションよりは、次に向けた受け入れを重点的に行い、今後のチャンスに迅速に対応し、掴み取ることが重要になってくる。官民協働で積極的に議論をして次の観光を目指していきたい。

(吉村部長)

- ・ 地域コーディネーター配置について、重要な取り組みと受け止めている。広域観光組織を中心に様々な事業者が集まっていたいただき、創生塾によるマネジメント人材の育成や地域おこし協力隊を活用して、専門人材を追加配置し、O J Tを行っている。これを県全体に拡大していきたい。これまでに、土佐龍馬であい博、龍馬ふるさと博、3度に渡る地域観光博覧会を開催してきた。拠点を作り、体験プログラムを組み合わせたルート作り、P Rと旅行商品化、そして誘客と受入という流れで、広域観光組織を中心に、四季折々に地域地域に誘客し、400万人観光の原動力になったと理解している。広域観光の推進は県の中核的な観光施策と思っているので、広いエリアで周遊したいという観光客のニーズやニーズに合致するルートを旅行会社に提案できることのどちらもメリットがある。
- ・ 安心安全の科学的な証明について、物部川DMO協議会では、独自に施設の安全をデータで示すような取り組みをしている。そういったものを県の広域観光協議会に広めていくような取り組みをしていきたい。ピンチをチャンスに変える取り組みの1つとして時流を生かして検討していきたい。

(北古味部会員)

- ・ 現在、スポンサーへの影響など様々なことを考慮しながらイベントを実施している。不安な部分があれば、中止するのは簡単ではあるが、開催に向けてアイデアを考えたり、前向きなアドバイスをくれるアドバイザーや相談窓口を作ってほしい。2月にプレシーズンマッチを予定しているが、無観客にするのは誰でもできるので、見たい方に来てもらえるような取り組みをしてほしい。
- ・ インバウンドでは、在日外国人の方々に県からどのようにアプローチをするかが重要だと思っている。2、3年をつなぐ策としてそういったアプローチをしてもらいたい。在日インフルエンサーとのつながりは生きていくと思うのでそういった施策もいいのではと思う。

(山脇副部長)

- ・ スポーツの誘致をするためのアドバイザーは必要だと思う。当部のスポーツ課において、健康政策部と話をしながらやっていきたい。実例を共有することで無観客を防げることもあると思う。前向きな相談ができる窓口について、スポーツ課に話をしておく。
- ・ 人と人とのつながりを大事にするのは重要。国際交流課に話をしておく。

(小西課長)

- ・ 在日の方へのアプローチについて、在日の方の意見を聞いて旅行先を選ぶという傾向もある。現在は、海外から直接メディアを呼ぶことはできないが、お付き合いをさせてもらいつつ、情報を発信してもらうようにしている。大使館の力も借りてアプローチをしていきたい。

(渡部部会員)

- ・ コロナ禍により資料調査が今まで以上に進んだため、これによって新しい資料や歴史の発見が予想され、それをきっかけに、各地で高知の文化を語る人の創出にもつながると思う。新しい資料をもとに文化活動、観光への協力を展開していきたい。今年は廃藩置県150年、来年は近代の学校政策が始まって150年、さらにその後には民権運動から150年など、全国的なレベルで高知が注目されるような記念の年が続くので、文化と観光が手を取り合って、全国に展開していくことが必要。
- ・ 広域的な地域をとりあげた文化展を開催しようと思っている。今年は仁淀川展、令和7年に物部川展と、川の流域を基本としたものを考えている。文化だけではなく、観光と関係する様々な部局に広がっていけばいいと思う。また、今も、学芸員が宿泊客に対して、半日くらいかけて、高知城の案内と展示解説をしている。さらに、夜にホテルで1時間くらい土佐の歴史を講義してほしいという、旅行者からのニーズに時々対応しており、通史ではない土佐独特の解釈や、土佐に来て分かる通史がひっくり返る話などに好評をいただいている。今後は、ホテル協会と組んだ活動も考えていかないといけないと思っている。

が、人が足りない。大々的に広がっても対応できないので、持続可能な形でシステムを構築する必要があるのではないかと考えている。

- 今年は全国資料保存利用連絡協議会の全国大会が、来年と再来年度は博物館大会が開催される。関係者には高知の文化に興味がある方が多いので、売り込みをすると、リピーターとしてかなりの観光客の創出になると思う。それに向けて観光と文化で高知をどうイメージアップすればいいかを検討していきたい。文化と観光がセットというのが常識になっており、県内70機関の博物館で構成するミュージアムネットワークでは、観光を意識した部会のようなものを設けてはどうかという声が上がっている。私たちから観光のどの部署にどのように話していいかわからないので教えてほしい。地域観光課からは話をいただいて廃藩置県をテーマにした県内の講演会や企画展の連携を始めている。何かしらの動きはしたいのでお声がけをしてほしい。

(吉村部長)

- 新しい歴史の発見を通じて隠れた史実とその内幕が明らかになるということについて、私も歴史が好きなのでわくわくしている。提案のあった廃藩置県の150周年などを通じてリョーマの休日キャンペーンでも明治維新前後の系譜を観光客に伝えられるような企画ができればと思う。
- 広域観光では、清流とその流域に広がる産業や暮らしなど身近な資源を生かした体験・滞在型の観光事業をスタンバイしているので、仁淀川展や物部川展は観光地域づくりの追い風になり大変ありがたい。
- 土佐独特の逸話の観光客への解説という試みは、ナイトタイムエコノミーの取り組みにも通じると思うので、システム化に向けてリョーマの休日キャンペーンでも組み合わせていただきたい。全国大会 in 高知など是非そういった裾野を広げていきたいので、地域の文化と歴史という観光の切り口で広げていきたい。

(眞田部会長)

- 昨年9月に高知県に弊社からの提言を船中八策ということで8つ出させていただいた。まず、ウィズコロナ時代において、感染防止対策が旅行先を選択する際の旅行者の大きな関心となることから、観光施設のウイルス安全基準として安心して来高いただけるような本県独自の民間基準、ガイドラインを設定してはどうかということ。2つ目は足摺国立公園等でのワーケーション推進。新たな旅行機会の創出と旅行需要の平準化、新たなライフスタイルの位置づけを見出すということ。3つ目は、高知を想起させるプロモーション。例えば、眼下に見下ろす高知の風景、若者目線の風景などを映像化し、国内外に発信することにより、高知を忘れさせないプロモーションが必要であるということ。4点目は、高知県の豊富な観光資源の活用。国内外の観光客をひきつけるために、アドベンチャーツーリズムの考え方を活用した着地型旅行商品のほか、夜間、早朝時間帯や食、歴史も含めて

コンテンツを造成すること。5点目は、デジタルマーケティング。官民一体となったマーケティングデータ収集により、将来にわたる高知の観光の基礎を築いていくこと。6点目は旅前、旅中、旅後の仕組みの構築。官民一体となって旅中コンテンツを開発し、ツーリズムアズアサービスを見据えて、地域の理解を促進していくことが重要であるということ。7点目は、インバウンドとアウトバウンドの回復施策。GoToトラベル事業と連動してリカバリーキャンペーンをやっているが、相乗効果や他県との差別化を図ることが重要であるということ。最後は、高知県産業振興計画に基づく観光戦略。産業振興計画と連動した県下観光行政の観光戦略の策定が必要であるということ。産官学の合意形成で具体的に取り組む施策や事業の選択を行っていくことが重要であるということを提言した。参考にいただければと思う。

- ・ 県内の私学において、感染症の影響で延期と変更が重なり、県内での修学旅行を進めているところがある。修学旅行にアドベンチャーツーリズムの考え方を入れ、「高知にふれあい学びを過ごす旅」ということで進めている。幡多エリアでの防災プログラムやTシャツアート展を入れて、Tシャツには医療関係者へのメッセージを入れるなど、アドベンチャーツーリズムの5つの要素を入れたものを作っているところ。実施されれば、本県の新たな素材になるのではと思っている。

(吉村部長)

- ・ 修学旅行にアドベンチャーツーリズムを取り入れたものを進めているということだが、これからも大いに広げていただきたい。他の部会員の皆様からいただいたご提案もリョーマの休日キャンペーンの中に取り入れて、他県との差別化を進めていきたい。産業振興計画の戦略づくりを引き続き産官学連携して進めていきたい。

(以上)